

平成 22 年 5 月 12 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2011

課題番号：19530454

研究課題名 (和文) ハンセン病問題の比較社会学的研究
—心理・社会的リハビリテーションの視点から—研究課題名 (英文) Sociological studies in Hansen' s Disease
: How to support patients and ex-patients in society

研究代表者

蘭 由岐子 (ARARAGI YUKIKO)

神戸市看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：50268827

研究代表者の専門分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会問題・社会運動、医療

1. 研究計画の概要

(1) わが国のハンセン病問題は 1998 年に提訴され 2001 年に判決が出されたハンセン病国賠訴訟において一挙に社会問題として認識されるようになったが、法的問題から離れて、ひとりひとりのハンセン病経験者がどのように生きてきたのかについての考察はいまだ少ない。そこで、本研究では、ハンセン病療養所入所者、「らい予防法」がいまだ存続していた時期に「社会」に出て生活してきたハンセン病療養所退所者、および、訴訟後の新規退所者の生活世界について考察することを第一の課題とした。また同時に、彼らを支えたひとびと一医師や支援者—についても、考察の対象とする。

(2) これまでの研究の途上で、研究者は、インドネシアにおけるハンセン病医学研究の実際と現地でのハンセン病経験者のありようの一端を知ることができたので、その点をより一層考察するために、インドネシアにおけるハンセン病医療および回復者支援とそれらの仕組みについて、調査、考察する。

(3) 研究課題を遂行するに際して研究者が直面する方法論上の問題等にも関心を払い、研究することそのものをリフレクシヴにとらえる。そのための社会的／社会調査の方法論の研究をおこなう。

2. 研究の進捗状況

(1) ハンセン病経験者、療養所退所者たちへのインテンシヴな聞き取りをおこなった。また、かねて知り合いの病者たちを訪ね歩くことによって、近年の生活状況の把握をおこ

ない、療養所入所者たちの「古い」とそれによる居住環境の変化を把握した。また、かつての絶対隔離政策の時代において、病者たちは自分自身をどのように支え（おもに文芸や評論活動の点から）、かつ、療養所外のひとたちとどのように交流したのかについて、かつて展開された療養所の将来構想についての議論から学んだ。

(2) かつて療養所に勤めたことのあるひとに聞き取りをおこない、ハンセン病者支援に関する信念や主張、思いを聞き取った。現在もハンセン病問題への関心は持ち続けているが、訴訟期以降のハンセン病問題のあり方には批判的であった。聞き取り当時、全国的に展開されていた「ハンセン病基本法」制定運動への態度とその理由がそれを象徴していた。

(3) 各種催しを通して、各地のハンセン病者支援の実際を観察した。とりわけ、国際的状況については、2008 年 1 月から 2 月にかけて開かれた第 17 回国際ハンセン病学会に参加し、ハンセン病者当事者運動が中心となりつつあることを知った。

(4) インドネシアのハンセン病医療および病者研究のために、渡航し、長年、ハンセン病の臨床にたずさわってきた医師に聞き取りをおこなった。また、現地のコロニーとハンセン病治療にあたっている病院を訪問した。

(5) インドネシアでハンセン病者支援にあたる日本人医師の研究室をおとずれ、最新の

研究状況について、その実際を観察するとともに、病者が多くでている地域における疫学調査（生活環境調査）に同行した。

（6）ハンセン病問題の根幹であるスティグマについての再考をおこなった。すなわち、2003年の黒川温泉ホテル宿泊拒否事件とそのおりに国立療養所菊池恵楓園に送られた「差別文書」を通して考察した。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

（理由）

大きく2つある。

ひとつは、インドネシアにおける現地調査が進んでいないからである。それは、研究者が学内外の諸業務や家人の看護・介護のため、この間、海外出張を計画通りに毎年おこなうことができない状況にあったためである。

ふたつは、ライフストーリー・インタビューなどトランスクリプトの作成や語り手のプライバシー保護をめぐるやりとりなどに時間がかかるというデータ編集にかかわる方法論上の問題のためである。その結果、公表できるナラティブ・データがととのわず、論考作成準備がいささか遅れている。

4. 今後の研究の推進方策

まずは、これまでに収集したデータ群を整理し、まとめて、学会発表や論考執筆までもっていく。

その過程で、不足しているデータを再度収集すべく、これまで赴いたフィールドに可能なかぎり出かける。また、観察や聞き取りによって収集したデータとつきあわせるために、関連する社会学的理論を再度検討する。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

1. 蘭由岐子、いま、あらためて“声”と向きあう、社会と調査、無、第3号、2009、38-44

2. 蘭由岐子、パラダイム・シフトへ、ソシオロジ、無、163号、2008、142-7

〔学会発表〕（計1件）

1. 蘭由岐子、ハンセン病者の語りから見えてくるもの、ハンセン病市民学会生年・学生部会、2008年9月6日、国立療養所栗生楽泉園

〔図書〕（計2件）

1. 好井裕明編、有斐閣、排除と差別の社会学、2009、（分担執筆部分 蘭由岐子「ハン

セン病差別の今日的様相」165-81）

2. 神原文子・竹田美知・杉井潤子編、ミネルヴァ書房、よくわかる現代家族、2009、（分担執筆部分 蘭由岐子「ハンセン病患者と家族」180-1）